

特集

～自分自身と大切な人のために～ 若い世代にも知ってほしい がんのハナシ

「がん（悪性新生物）」は日本人の死亡原因1位であり、男女ともに2人に1人はがんになるといわれています。高齢になるにつれて発症率が高いとされていますが、生活環境の変化などにより、最近では、10代や20代といった若い世代が がんにかかるケースも多くなっています。

今回の特集では、若い世代のがんや、がんの原因の一つであるHPV（ヒトパピローマウイルス）、また、その予防法などについてお伝えします。詳しいことは、保健センター（95-4801）へお問い合わせください。



若い世代のがん

思春期・若年成人世代を「AYA（アドレセント・アンド・ヤングアダルト）」世代といい、主に15歳から39歳までの年代を指します。この世代は、がんにかかる率やがんによる死亡率が低いいため、自分ががんだとは思わず、学業や仕事を優先し医療機関の受診が遅くなる傾向にあります。がん治療をすることとなった場合には、ライフステージが大きく変化する世代でもあるため、学業や就労などの遅れ・中断が発生し、生活へ大きな影響を与えてしまいます。

がんの発生状況を性別・年代別にみると、男性は40歳以上と比べて、39歳以下で白血病の割合が多く、女性は40歳以上と比べて、39歳以下で子宮頸がんの割合が多いことが分かっています（国立がん研究センター調べ）。このように、AYA世代の方がかかりやすいがんもあるため、性別・年代に合った予防法や対策を知っておくことが大切です。

原因と予防法

がんの原因には、生活習慣の乱れや、ウイルスの感染などがあります。予防法はさまざまで、生活習慣の乱れが原因のがんは、禁煙や節酒、適度な運動、適正体重の維持などに取り組むことが予防につながります。また、ウイルスなどの感染が原因のがんには、ワクチン接種によって予防できるものもあります。

ワクチン接種で予防できるがんとして、子宮頸がんの原因のほとんどは、HPV（ヒトパピローマウイルス）の持続的な感染です。HPVワクチンの接種は予防接種法に基づいて行われます。その安全性は国が保障しており、接種による感染予防の有効性が、接種後の副反応のリスクを明らかに上回ると認められたことから、接種が勧められています。

信頼できる情報源から最新の情報を取り入れ、自分で判断して予防に取り組ましましょう。

がん教育を実施しています

がん対策基本法の下、国が策定した「がん対策推進基本計画」により、市においても、子どもに対するがん教育を推進しています。

豊川高校では1月下旬、男女約750人の生徒を対象に、ささき小児科院長・佐々木俊也医師による「大切な命を守るため 高校生のみんなに知ってほしい がんのほんなし」と題した講演会が行われました。



講演会の様子

講演を聞いた生徒の声



豊川高校2年・杉田 七海さん

がんは身近な病気だと感じました。定期的に検診を受け、早期発見・早期治療することが大切だと思います。生活習慣なども見直して、がん予防に取り組みたいと思いました。

がんは大人になる病気だと思っていましたが、自分もなる恐れがある年代だということを知りました。無関心にならず、家族ともがんについて話し合っていけたらと思います。



豊川高校3年・渡辺 琉里さん

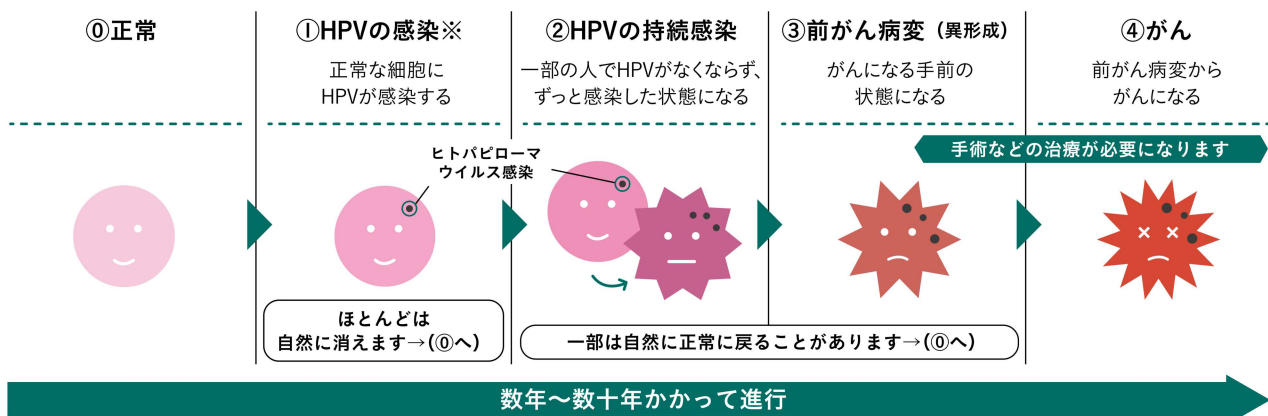


ヒトパピローマウイルス

HPVに感染するとどうなるの？

HPVは、性的接触のある女性であれば、その多くが「一生に一度は感染する」といわれているウイルスです。ほとんどの場合、感染してもウイルスは自然に消えていきますが、感染している状態が長く続くと、一部の人ががんになってしまうことがあります（下図参照）。また、感染した後どのような人がんになるのかまだ分かっていないため、感染を防ぐことががんにならないための手段とされています。

このウイルスは性的接触によって男性にも感染する恐れがあり、中咽頭がんなどのがんを引き起こすことがあります。HPVによる中咽頭がんは、喫煙や飲酒による場合と異なり、早期発見が困難ながんといわれています。「HPV＝女性」というイメージを持たれてしまいがちですが、男性にも大いに関係のあるウイルスです。



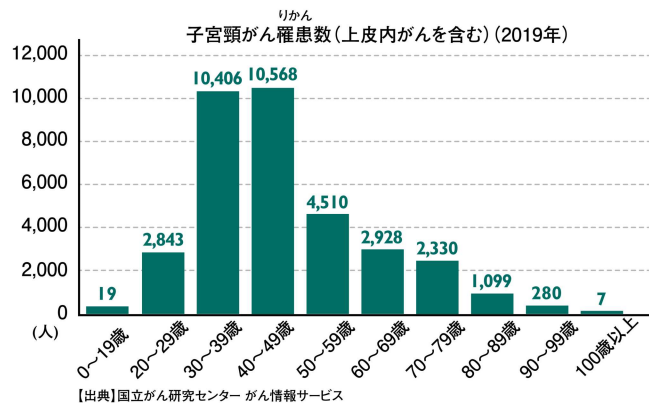
※HPV感染は、一生のうちに何度も起こりえます。

子宮頸がんを数字で見ると…

20

子宮頸がんが増える年代

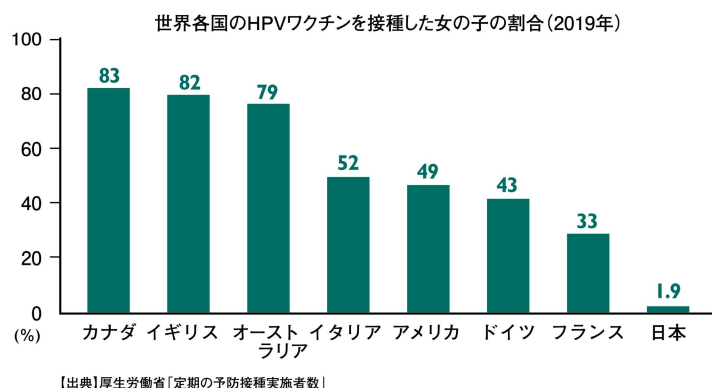
子宮頸がんと診断される人の数は**20代前半**から増え始めます。また、一生のうち、子宮頸がんになる人は76人に1人で、日本では毎年、約1.1万人が子宮頸がんになっています。



1.9

HPVワクチン接種率

日本におけるHPVワクチンを接種した女性の割合は、世界的にみると特に低く、約**1.9%**。接種率の高い国では、2028年までに、HPVによる子宮頸がん患者がほぼいなくなるといわれています。





総合青山病院
婦人科 宮本 由記 医師

男女関係なく 全ての人に知ってほしい ヒトパピローマウイルス

日頃から多くの若い世代を診察している婦人科と小児科の医師2人に、予防接種やがん検診の必要性、ヒトパピローマウイルスについて話を聞きました。



総合青山病院
小児科 鈴木 久美子 医師

宮本医師

ウイルスの感染を防ぎ、がんを予防するための予防接種の一つに、HPV（ヒトパピローマウイルス）ワクチンがあります。HPV

がんに限らないことですが、ワクチンを接種すると、その病気に対する免疫が作られ、感染症の発症や重症化を予防できます。接種の時期は、病気にかかりやすい年齢や重症化しやすい年齢などに応じて決められているので、病気にかかりやすく重症化しやすい乳児は多くの種類の予防接種を打っているんです。

鈴木医師

そうですね。がんの種類によつて対策は異なりますが、ワクチン接種で予防できるものがあるということを知ってほしいですね。

宮本医師

がんの原因についてはまだ分かっていないことが多くありますが、ウイルスなどの感染が原因でかかるがんの場合、感染を防ぐことで身を守ることができるようになります。

鈴木医師

は男性も女性も持っている可能性のあるウイルスです。現在、豊川市では、一部の年齢の女子を対象に無料の予防接種が行われています。この機会に、ワクチン接種を検討してみたいかがでしょうか。

鈴木医師

予防接種は、病原性や活性をなくしたウイルスや細菌の一部、毒素をワクチンとして接種します。診察していると「本当に接種しても大丈夫か」、「痛いから嫌だ」、「副作用が心配」といった声をよく聞きます。健康な体にウイルスや毒素を入れると聞いて心配になったり、痛いのを嫌がったりする気持ちはよく分かります。接種するワクチンについて気になることがあれば、「診察以外のことを聞いてもいいのかな」などと遠慮せず、かかりつけ医にぜひ相談してください。予防接種は強制ではありませんので、メリットとデメリットをよく理解していただいた上で、接種する本人が保護者と相談して決めてください。

宮本医師

HPVワクチンを接種する場合も接種しない場合も、20歳を過ぎたら、2年に1回は、ぜひがん検診を受けていただきたいです。もしHPVに感染して細胞に異変があっても、早期発見・治療ができれば、子宮頸がんは治る可能性の高いがんです。

インターネットにはたくさんの情報があふれています。が、信頼できる情報源かどうかを見極めて判断することが大切です。また、かかりつけ医はもちろん、家族や学校の先生など、周りに相談できる人をつくっておきましょう。医学は日々、進歩しています。新しい情報を取り入れ、自分のために、大切な人のために、今できることを考えられるといいですね。

／ 参考してください ／



厚生労働省
ホームページ



日本産科
婦人科学会
ホームページ